

第 31 回東京医科大学医科学フォーラム The 31st Medical Science Forum (MSF)

秋 元 治 朗¹⁾ 佐々木 光 美²⁾
Jiro AKIMOTO¹⁾, Mitsuyoshi SASAKI²⁾

オーガナイザー

¹⁾東京医科大学脳神経外科学講座

²⁾東京医科大学神経生理学講座

2010年6月24日(木)午後6時より東京医科大学教育棟5階講堂にて、第31回東京医科大学医科学フォーラムが開催された。今回は「がん病理形態学の新潮流」をテーマとして本学からは東京医科大学人体病理学講座の佐藤永一講師に『自然発生がんでの免疫反応の評価法：がん免疫療法への応用』と題して御講演いただいた。その後、第20回日本光線力学学会会長で、福井大学医学部腫瘍病理学領域の三好憲雄講師から『赤外線凍結病理切片を診ると面白いものが見えてくる：分光画像診断への試み』と題して病理形態診断の新しい方法論での展開を御講演いただいた。

がん病理形態診断は当然ながらがん診断の中心となるべきものである。しかし近年の分子生物学的診断技術の向上、とくにPCRやCGH、更にはDNA tipなどの遺伝子診断技術の普及により、従来は形態診断の補助的な存在であったこれらの情報が、一部のがん種では形態診断を凌駕し、分子標的療法を中心としたテーラーメイド医療との結実に至っている。特に乳癌におけるHER-2発現はその診断技術も保険承認されており、いまや病理診断医にとってはこれらの遺伝子情報を臨床医に伝えることが義務付けられている。今回のフォーラムにおいては、これらの実情を踏まえながら、従来の形態診断学の展開につき2名の御講演をいただいた。

佐藤先生には、がん組織に浸潤するT細胞の発現量やがん-精巢抗原の発現量などが卵巣癌や肺癌

症例の予後に強く相関することを示し、現在施行されているがんワクチン療法の医師主導型治験の現況を報告された。病理形態学からのアプローチが、がん免疫療法の治療効果予測に役立つことを示され、米国留学時からの研究経験が臨床治験への展開に繋がった経緯を、明快に発表していただいた。その後、三好先生からは凍結病理切片に赤外線を照射し、その吸収光を分析することによって組織中の核酸量や蛋白質の二次構造を推定可能であると述べられ、特に御自身が開発された連動FT-IR分光顕微専用診断機を用いた肺癌組織の分光分析においては、術中迅速診断への応用も可能であることを示された。脳神経外科学講座においては、がん組織に近赤外光を照射することによって得られる散乱光を分析する顕微ラマン分光分析装置を開発しており、今後の研究展開においてもおおいに参考になる御講演であった。

50名弱の聴衆からは両者の御講演に対して多彩な質疑応答がなされ、病理形態診断の更なる発展を願う研究者、臨床医の思いを感じることができた。今後も本フォーラムにおいて同様なテーマが取り上げられ、最先端の情報共有が成されることを願っている。フォーラムの終了後は、大学病院6階カフェテラスで懇親会が行われ、2名の講師に質問をする参加者が絶えなかった。

(文責 秋元治朗)